

今日の国語の授業では、「表現手段と文字」というテーマについて学習することになった。授業では、まずはじめに、資料A、資料B、資料Cの三つの資料が先生から生徒全員に配られた。その授業での先生と生徒との会話の一部と、それについての「問い」を一度聞き答える。

- 先生 皆さん、今日の授業では、「表現手段と文字」というテーマについて考えていくことにしましょう。今日の授業では、先ほど私が配った資料を見ながら、手書きの文字と、ワープロやパソコンを使って印刷された文字とを比べますが、ここでは後者の文字のことを、「パソコンの文字」と呼ぶことにします。では、始めましょう。まず、皆さんは、手書きの文字とパソコンの文字との違いについて意識したことはありますか。はい、鈴木さん。
- 鈴木 はい。先生、ぼくはあまり意識したことはありませんが、改めて考えてみると、授業で配られるプリントなど、私たちが目にする文字には、パソコンの文字がたくさんあります。
- 先生 そうですね。パソコンの文字を目にする機会も多いですね。では、資料Aを見てみましょう。この資料は世帯におけるパソコンの保有率の推移をグラフにしたものです。鈴木さんはこの資料を見て、どのような感想を持ちますか。
- 鈴木 はい。パソコンの保有率が、九年間で三十二・六パーセントから八十五・〇パーセントまで伸びていることにとっても驚きました。
- 先生 本当ですね。パソコンが身近な存在になったのは、ここ数年だということが資料から分かりますね。では次に、資料Bを見てみましょう。この資料は、ある意識調査の結果で、文書作成のためにワープロやパソコンを使っているかどうかを尋ねたものです。皆さんは、この資料を見て、どのような感想を持ちましたか。はい、それでは佐藤さん、どうぞ。
- 佐藤 はい。私は、この資料を見て、ちょっと意外だなと思いました。確かに資料Aから、パソコンの保有率が大きく伸びていることがわかりますが、資料Bを見ると、文書を作成するために、パソコンなどを「よく使っている」または「時々使っている」と答えた人の合計は、四十八・九パーセントです。
- 先生 そうですね。文書作成以外の目的で、パソコンを利用する人がいるということでしょうか。中にはインターネットで情報を検索するためだけにパソコンを使っている人もいますよね。また、パソコンが家にあっても自分は使わないという人もいるかもしれません。佐藤さんはどうですか。
- 佐藤 はい。私は先週、パソコンを使って職場体験学習のレポートを作りました。パソコンは、印刷された文字がきれいなので、文書作成のためによく使います。でも、私の母がパソコンを使うのは、インターネットの利用の時だけです。
- 先生 なるほど。では、文書作成にワープロやパソコンを使うかどうかは、その人の好みなのでしょう。次に資料Cを見てみましょう。この資料は、資料Bと同じ調査において、資料Bの問いに対して、「よく使っている」または「時々使っている」と答えた人を対象に、さらに質問したものです。この資料を見て、気付いたことがありますか。はい、山田さん。
- 山田 はい。ぼくは、資料Cから、文書作成にワープロやパソコンを使う人でも、場合によっては手書きにすることが分かりました。
- 先生 では、山田さん、場合によって、手書きとパソコンとを使い分けるのは、どうしてだと思いますか。
- 山田 はい。それは多分、それぞれに良さがあるからではないでしょうか。
- 先生 そうかもしれませんね。それでは、それぞれの特徴を比べやすくするために、これから皆さんに、立場を決めて考えてもらうことにしましょう。皆さんは、表現手段として、手書きとパソコンのどちらをより重視していきたいですか。どちらが立場に立って、自分の考えを意見文の形でまとめてみましょう。

① 鈴木さんは、どの資料についての感想を述べましたか。その資料として適当なのは、(1)～(3)のうちのどれですか。

- (1) 資料A
(2) 資料B
(3) 資料C

② 佐藤さんが文書作成のためにパソコンをよく使うのは、なぜだと言っていましたか。解答欄に合うように、十五字以内で書きなさい。

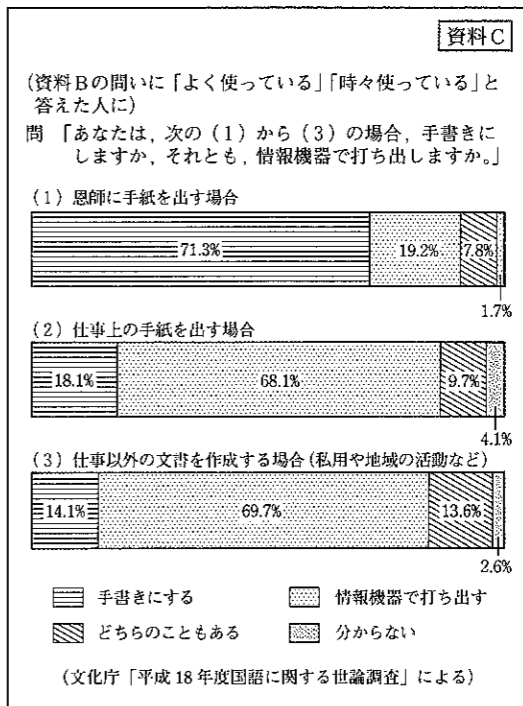
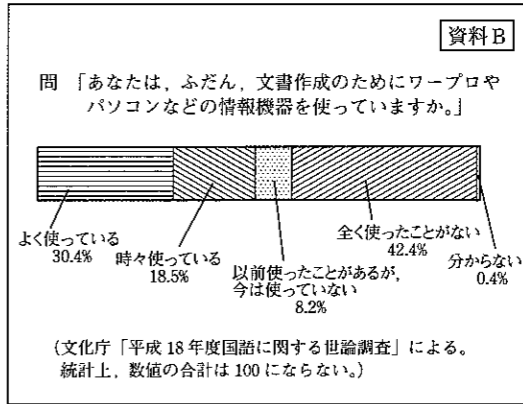
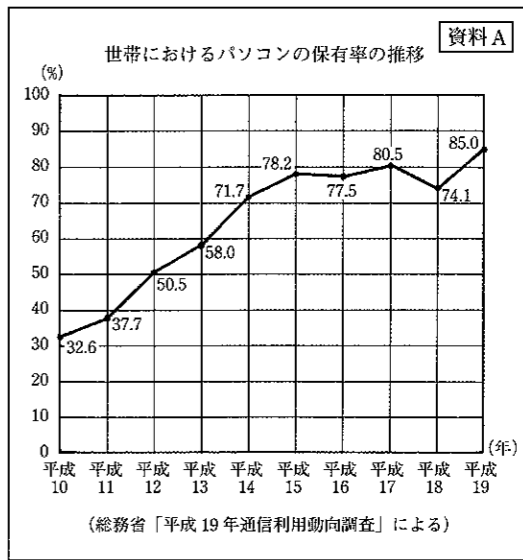
③ この会話での生徒の発言について述べたものとして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) 全員が、身の回りの具体的な出来事に触れながら話している。
(2) 他の生徒の発言をささぎって発言する生徒がいる。
(3) 全員が、読み取った資料の内容に基づいて発言している。
(4) 他の生徒の意見に対して反論する生徒がいる。

④ 「表現手段として、手書きとパソコンのどちらをより重視していきたいですか。」という、最後に先生が尋ねたことについて、あなたがこの授業に参加していたとしたら、どう考えますか。あなたの考えを意見文の形で、百五十字以内で書きなさい。ただし、資料A、資料B、資料Cのうち一つ以上の資料の内容に触れながら、あなたの主張がよく伝わるように、主張の根拠や理由を含めて書きなさい。なお、資料に示された数値を表記する場合は、解答用紙に示した例を参考にしなさい。

注意 字数が指定されている設問では「、」「や」「。」も一ます使いなさい。

1 【聞き取り検査】放送による指示に従いなさい。答えは、解答用紙に記入しなさい。



2

次の文章は、二十七歳の会社員の「ぼく」が、思いもよらず文芸雑誌の新人賞を受賞し、その受賞作が出版された後に、生まれ育った家の近所にありよく利用していた「ミツザワ書店」を十一年ぶりに訪れた場面である。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

「見ますか、ミツザワ書店。」女の人は立ち上がって手招きをした。玄関から続く廊下の突き当たりが、店と続いているらしかった。女の人は塗装のはげた木製のドアを開け、明かりをつける。

本の持つ独特のにおい、紙とインクの埃っぽいような、甘い菓子のようなにおいがぼくを包みこみ、目の前に、あの懐かしいミツザワ書店がそのまま立ちあらわれる。

「店は閉めているけれど、そのままにしているんです。片付けるのも処分するのも面倒だというのが本音ですけど。ほとんど倉庫ですね。」

女のひとともに、店内に足を踏み入れた。床から積み上げられた本、平台に無造作に積まれた本、レジ台で壁を作る本、棚にぎゅうぎゅうに押しこまれた本……。記憶と異なるのは光だけだった。ガラス戸から黄色っぽい光が差しこんでいた薄暗いミツザワ書店は、今、蛍光灯のつべりした明かりに照らし出されている。

「祖母は本当に本を読むのが好きな人でね。お正月なんかに集まっても、ひとりで本を読んでもましたよ、子どもみたいに。読む本のジャンルもばらばら。ミステリーのこともあるれば、時代小説のこともあったし、あるとき私がのぞきこんだら、UFOは本当に存在するか、なんて本を読んでいたこともあった。祖母が祖父と結婚した理由っていうのも、祖父が本屋の跡取り息子だったからなんですって。祖父が亡くなつてからは、自分の読みたい本ばかり注文して、片っ端から読んで。売り物なのにね。」女の人は積み上げられた本の表紙を、そつと撫でさすりながら言葉をつなぐ。

「私、子どものころおばあちゃんに訊いたことがあるの。本のどこがそんなにもしろいの、って。おばあちゃん、何を訊いてるんだって顔で私を見て、『だってあんた、開くだけでどこへでも連れてつてくれるものなんか、本しかないだろう』って言うんです。この町で生まれて、東京へも外国へも行ったことがない、そんな祖母にとって、本っていうのは、世界への扉だったのかもしれないですよ。」

それを言うなら子どものころのぼくにとつて、ミツザワ書店こそ世界への扉だったとぼくは思ったけれど、口には出さなかった。そのかわり、棚を見るふりをして通路を歩き、茶封筒から自分の単行本をすばやく抜き取り、塔になった本の一番上にそつと置いた。

本で満たされた店内をぼくはもう一度眺めまわす。埃をかぶった本は、すべて呼吸をしているように思えた。ひっそりと、時間を吸いこみ、吐き出し、だれかに読まれるのをじつと待っているかのように。そのなかに混じったぼくの本は、いかにも新参者という風情で、居心地悪そうだった。しかし幸福そうでもあった。作家という不釣り合いな仕事をはじめたばかりのぼくのように。

礼を言っておくが、門まで見送りにきた女の人は、恥ずかしそうにうつぶわいて、「いつかあそこを開放したいと思ってるんです。」と小さな声で言った。

「図書館なんておこがましいけれど、この町の人が読みたい本を好き勝手に持って行って、気が向いたら返してくれるような、そういう場所

を作れたらいいなって思っているんですよ。」

「そうやってほしいと、じつはさつき思っていたんです。楽しみにしています。」ぼくは言った。

シャッターの閉まったミツザワ書店の前を過ぎる。高く晴れた空の下、ひっそりとした商店街を歩く。数十メートル歩いて振り返ると、記憶のなかのミツザワ書店が色鮮やかに思い浮かんだ。店の前に並べられた週刊誌やマンガ、埃で曇った窓ガラス。それはそのまま、未来の光景でもあるんだらう。世界に通じる小さな扉は、近々きつと開くのだから。不釣り合いでも、煮詰まっても、自分の言葉に絶望しても、それでもぼくは小説を書こう、ミツザワ書店の棚の一部を占めるくらいの小説を書こうと、書き初めに向かう子どものような気分を思う。

顔を上げると、青い空に扉がひとつ浮かんでいた。

(出典 角田光代「ミツザワ書店」)

① ———の部分㉞、㉟の漢字の読みを書きなさい。

② ~~~の部分㉠～㉡の語のうち、付属語をすべて選び、その記号を書きなさい。

③ 「女の人は……言葉をつなぐ」とあるが、このときの「女の人の」

気持ちの説明として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 「祖母」の残した大量の本をどうしようか途方に暮れている。

(2) 本が大好きだった「祖母」の様子を思い出して懐かしんでいる。

(3) 突然現れた「ぼく」と何を話したらいいか戸惑っている。

(4) 好きな本を思う存分読んだ「祖母」の自由奔放さに憧れている。

④ 「そんな……扉だった」とは、どういうことか。それを説明した次の文の□□に入れるのに適当なことを、文章中のことばを使って五十五字以内で書きなさい。

本は、□□であつたということ。

⑤ 「そのなかに……ぼくのように。」とあるが、このときの「ぼく」

の気持ちの説明として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 作家という不釣り合いな仕事を始めたことを後悔しながらも、お世話になった書店に自分の本を置くことに誇りを感じている。

(2) まだ読まれていないこの本の売れ行きを案じる一方で、世界への扉だったこの書店に本を並べることができ、安心している。

(3) 「女の人の」に黙って本を置くことを申し訳なく思う一方で、「おばあちゃん」に恩返しできたような気がして満足している。

(4) 作家という新しい仕事への戸惑いを感じながらも、だれかに読まれるために本を書くというこの仕事の喜びも感じている。

⑥ 「記憶のなかのミツザワ書店」とあるが、「ぼく」が記憶していた

かつての「ミツザワ書店」の店内の様子と、「ぼく」が十一年ぶりに訪れた「ミツザワ書店」の店内の様子との違いが最も具体的に描かれている一文を文章中から抜き出し、はじめの五字を書きなさい。

「記憶のなかのミツザワ書店」とあるが、「ぼく」が記憶していたかつての「ミツザワ書店」の店内の様子と、「ぼく」が十一年ぶりに訪れた「ミツザワ書店」の店内の様子との違いが最も具体的に描かれている一文を文章中から抜き出し、はじめの五字を書きなさい。

次の文章Iは、松尾芭蕉『おくのほそ道』の一節、文章IIは、べたものである。これらを読んで、①～⑦に答えなさい。

I

那須の黒羽といふ所に知人あれば、これより野越えにかかりて直道をゆかむとす。はるかに一村を見かけて行くに、雨降り、日暮るる。農夫の家に一夜をかりて、明ければまた野中をゆく。そこに野飼ひの馬あり。草刈る男になげきよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬにはあらず。「いかがすべきや。されどもこの野は東西縦横にわかれて、うひうひしき旅人の道ふみたがへむ、あやしう待れば、この馬のとどまる所にて馬を返し給へ。」と、かし侍りぬ。小さきもの二人、馬のあとしたひて走る。一人は小娘にて、名を「かさね」といふ。聞きなれぬ名のやさしかりければ、かさねとは八重撫子の名なるべし 曾良

やがて人里に至れば、あたひを鞍つばに結びつけて、馬を返しぬ。

曾良 『おくのほそ道』の旅に同行した芭蕉の門人。なお、この曾良の句は、芭蕉が作った可能性もある。

鞍つば——鞍の真ん中の、人が乗るへこんだところ。

II

『おくのほそ道』はドキュメントではありません。文学作品ですから、実際の旅とは随分違っています。『曾良随行日記』を参照すると、『おくのほそ道』が、訪ねた先の順番を替えたりフィクションを入れたりなどして、事実をアレンジしていることがよく分かります。フィクションだろうと言われているのは、旅ならではの牧歌的体験を記した那須野の一節です。馬方なしに馬なりに広大な草原を渡って行く。小さな子が二人、馬の後を走ってくる。エイガのシーンのようですね。代金を鞍につけて馬を返す。都市生活では思いもよらない、旅ならではの牧歌的体験です。花の名前「撫子」は、古典和歌では「撫でし子」との掛詞として盛んにうたわれてきました。「撫でし子」とはつまりかわい女性の意味です。「撫子」可憐な女性」のイメージを、和歌史は何百年もの時間をかけて育て上げてきたのでした。この句はそのイメージを踏まえています。鄙には不似合いな「かさね」という雅な名前。『伊勢物語』の冒頭部、狩りに来た男が寂れた古里に不似合の優美な姉妹に偶然出会うエピソードが思い出されます。ミスマッチが輝かす雅です。日常では出会えない、どきどきするような旅の醍醐味です。

実際の芭蕉は、曾良を伴っての二人連れのはずです。曾良も子どもたちと一緒に、小走りした後をついてきたのでしょうか。ここでは、そんな現実の細部はそぎ落として、旅の気分が盛り上げられてゆきます。フィクションであろうとなかろうと、事実の奥に真実を見ようとすると芭蕉の心には、旅先ならではのシーンとして那須野の風景はクローズアップされたのでした。

〔出典 佐佐木幸綱「芭蕉の言葉『おくのほそ道』をたどる」ドキュメント——記録。『曾良随行日記』——『おくのほそ道』の旅に同行した曾良の旅日記。アレンジ——脚色。作り変えること。馬方——馬を引く職業の人。掛詞——和歌などにおける表現技法の一つ。同音異義語を利用し、一つの語に二つの意味を持たせるもの。鄙——都から遠く離れた土地。いなか。『伊勢物語』——平安時代の歌物語。ミスマッチ——不釣り合いなこと。〕

III

『笈の小文』の中に、芭蕉は旅について、次のように書いている。

旅に出て、その土地それぞれにゆかりの古人のことを思い、絶景を眺めては造化の神の見事なわざに感心する。かごに乗るかわりにゆつくり歩き、腹をすかして食事をすれば何でもうまい。その日のうちにどこまで行かなければならないということもなく、朝はいつ出発しなければならぬという宿をかりたいということ、ただ一日に二つのことだけを願っている、今宵はいい宿をかりたいということ、自分の足によく合ったわらじがほしいということ。旅にあれば一日一日が新鮮で、もしわずかに風雅の心得のある人に出会っただけでも大変嬉しい。ふだんだと古めかしく頭がかたいとして嫌うような人でも、辺鄙な土地の道づれになつて語り合

うと、思いがけないところで貴重な宝物を得たような気がして、ものに書いたり、人に話したりしたいと思う。それも旅の楽しみの一つである。これが芭蕉の望む旅である。実際の旅はなかなかこうとばかりはいかない。つまりこれは、いささか感傷的な空想の旅である。そして『おくのほそ道』は、もつとも空想の旅に近付いた作品だといっていい。虚構があつて当たり前なのである。〔出典 山下「芭蕉の世界」(注)『笈の小文』——『おくのほそ道』に先立つ芭蕉の紀行文。造化の神——天地万物を作り出した神。〕

①——の部分④、⑤を漢字に直して楷書で書きなさい。

②「さすがに情しらぬにはあらず」とあるが、「情しらぬにはあらず」という芭蕉の判断はどのような出来事に基づいているか。その説明として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) 捜していた馬の持ち主を、ついに見付けることができたこと。
- (2) こちらの頼みごとに対して、男が親切に対応してくれたこと。
- (3) 困り果てている男を、そのまま見捨てて来てしまったこと。
- (4) 男が、こっそり馬を盗んだことを素直に謝ってくれたこと。

③「うひうひしき」の読みを、現代かなづかいを用いてひらがなで書きなさい。

④「あたひ」の現代語訳に当たる語を、文章IIの中から抜き出して書きなさい。

⑤「事実をアレンジしている」とあるが、文章IIの筆者は、文章Iを表現するための「アレンジ」を施した際に芭蕉が行ったと考えられる操作について、どのようなことを指摘しているか。それを説明した次の文の□□に入れるのに適当なことを、文章IIの中のことはを使って十五字以内で書きなさい。芭蕉は、実際の曾良の行動の様子など、表現に不必要だと考えた□□ということ。

⑥「この句は……踏まえています」とあることを踏まえて、曾良の句について説明した次の文の□A、□Bに入れるのに最も適当なことを、文章Iまたは文章IIの中から、それぞれ漢字四字で抜き出して書きなさい。この句は、□Aではかわいい女性のことを撫子にたとえることから、少女の名前「かさね」を「重ね」の意味にとつて、この少女はただの撫子ではなく花びらを重ねた□Bであろうと詠じた句である。

⑦ 中学生の春子さんと秋子さんは、先週の国語の授業で文章Iと文章IIを読み比べました。そこで芭蕉に興味を持った二人が図書館で芭蕉に関する本を調べたところ、文章IIIを見付け、次の会話を交わしました。

〔春子〕 先週の授業で読んだ文章では、芭蕉が「かさね」という少女に出会った那須野での体験を描いた一節が、フィクションだろうと言われているって書いていたよね。
〔秋子〕 うん。私たちが今見付けたこの文章にも同じ意味の単語があるじゃない。二つの文章の内容って、この点で似通っているよね。

〔春子〕 ほかに、この二つの文章には何か関連がないかな。
〔秋子〕 今見付けたこの文章って、芭蕉の理想とする旅について書いているよ。先週読んだ文章で『伊勢物語』の例と一緒に説明されていた、那須野で芭蕉が感動したこと、同じことを言っている部分があるね。

〔春子〕 そうよね。だから、那須野の一節で「かさね」との出会いを引き立たせる工夫をしたのかもしれないよ。

会話文中の、「二つの文章の内容……似通っている」、「那須野で芭蕉が……部分がある」という発言を踏まえた上で、文章IIの筆者と文章IIIの筆者の考えの共通点について説明した次の文の□□に入れるのに適当なことを、三十五字以内で具体的に書きなさい。文章IIの筆者も文章IIIの筆者も、『おくのほそ道』の中で芭蕉は、旅先でこそ引き立つ□□と考えている。